

学内広報

for communication across the UT



特集：「ハーバード白熱教室 in JAPAN」開催

2010.9.24

No. 1403

特集 ハーバード白熱教室 in JAPAN 開催



マイケル・サンデル
Michael J. Sandel

1953年生まれ。ハーバード大学教授。専門は政治哲学。NHK教育テレビ「ハーバード白熱教室」の講義や、早川書房刊「これからの『正義』の話しよう」でも著名。

東大での問いの一部

救命ボートで乗組員4人が漂流した。いつ助けがくるのかわからない。船長は海水を飲んで死にかけている雑用係で孤児の少年を殺し、その肉と血で命をつないだ三人は無事帰国することができた。この殺害は道徳的に許されるだろうか？

イチローの年俸は日本の教師の400倍、オバマ大統領の42倍。特別な課税によりイチローの収入の一部を国が回収し、貧しい人々に再分配するのは公平だろうか？

すべき。10億ドル稼ぐ人が5億ドル取られても痛くもかゆくもないが貧しい人には大きな救いになる。

努力と才能で得た収入は財産である。財産を勝手に取って国が再分配するのはおかしい。

自分の意思で貧しい人に寄附するべき。

論点①
公平とは？

東大入試の合格点にぎりぎり達しない受験生の両親が、大学に5000万ドル(約42億円)の寄附を申し出た。この金があれば大学は新しい図書館を建てられる。入学させるべきか？

男子学生A「入試の点数を基準とすると明示しているのに、そのようなことをすると大学は信用を失い、結局大きな損害になる」
サンデル教授「1人入学させるだけで、他のたくさんの学生が利益を受けられるんだ。倍の10000万ドルだったら？」

男子学生A「額が大きいほど失う信用も大きく、損害が大きい」
サンデル教授「それでは最初から、入学の権利をオークションにすれば、お金で入学しても公平じゃないか！ そうだろうか？」

男子学生B「レベルの高い教育が受けられるのは受験勉強の努力に対する報酬であるから公平ではない」

男子学生C「いや、そうではなくて、質の高い研究活動を行うことが大学の目的だという理由で、その学生を入れるべきではない」
女子学生「1人くらい入れてもいいのではないか？」

サンデル教授「では全く同じ条件の受験生がもう1人いたらどうする？」

女子学生「毎年何人くらい入学するんですか？」

会場の声「3000人くらい」

女子学生「じゃあ2人ぐらいならいいかも」

サンデル教授「ではさらにもう一人、同じ成績で同じだけの寄附をもらえる学生がいたら？ 全部で3人だ」

女子学生「うーん」

8月25日(水)安田講堂にて、ハーバード大学マイケル・サンデル教授による「ハーバード白熱教室in JAPAN」(大学総合教育研究センター・NHK共催)が開催されました。身近な問題を題材に「正義」を論じる、4時間を超える対話型講義となり、本学の学生や一般参加者らがサンデル教授と熱い討論を交わしました。講義後に行われた本学法学部・井上教授と千葉大学法経学部・小林教授との鼎談でサンデル教授は「世界の教室をビデオ会議でつないだ“Global Classroom”で講義をしたい」など今後の展望を語りました。

哲学の問題は われわれの日常生活にあるのです

論点②
道徳的責任は
個人が負うべきか
集団が負うべきか

兄が連続殺人容疑で告発された。弟は、逃亡中の兄と電話で話したが、その所在は知らないと言明し当局の捜査への協力を拒んだ。家族の忠誠は、社会への義務より優先されてもいいのだろうか。

オバマ氏は広島・長崎への原爆投下を謝罪するべきか。謝罪するべきであれば、どのような形で責任を果たすのがもっともよいだろうか。

今の日本人は1930年代からの日本の行為について東アジアに謝罪をするべきか。

どこに生まれるかは自分では選べないのだから、責任を負う必要はない。

ある企業が不祥事を起こしたとして、担当者が変わったら謝罪はしないということはないだろう。それと同じで、共同体単位で行ったことには後の世代が謝罪する義務がある。

当事者の世代同士で解決するべき。いつまでも謝罪することになる。

国や文化が連続している中で自分たちは育てられている。当然責任はある。

実行しなかった人間が責任を負うのはおかしい。

サンデル教授は冒頭で、友人から「日本人はシャイだから積極的な議論ができない」と言われたことを話し「積極的な議論ができるか？根拠を言えるか？」と問いかけました。男子学生の答えは「僕は新しい世代だから」。教授は「その答え、気に入った」と述べて講義を始めました。講義中は常に何人もの参加者が発言しようと熱心に手を挙げており、白熱教室は予定を1時間半もオーバーしました。最後にサンデル教授は「皆さんは私の友人が間違っていたことを証明してくれた。真剣で非常に刺激的な講義ができ感動した」と述べ「これからも哲学の議論を続けてほしい」と締めくくりました。

放映予定：
NHK教育10月3日(日)、10日(日)18:00-18:58

ウェブサイト「東大TV」<http://utnav.jp/>ならびに「東京大学 iTunes U」からも、放映終了後に公開される予定です。
(東京大学iTunes Uは、東京大学教育企画室TREE(Today Redesigning Educational Environment:教育環境リデザインプロジェクト)により運営されています。)

<問い合わせ先>
大学総合教育研究センター
担当 重田・中原 内線:27823

NEWS

会田由翻訳賞受賞

野谷文昭 大学院人文社会系研究科・文学部教授

人文社会系研究科の野谷文昭教授（現代文芸論）が、会田由翻訳賞を受賞しました。会田由翻訳賞は、75年、財団法人日本スペイン協会が、「ドン・キホーテ」などの翻訳者、故・会田氏を記念して創設され、優れたスペイン語訳と和訳の訳者に贈られる歴史ある翻訳賞です。



野谷教授は、20世紀中葉に始まったラテンアメリカ小説の〈ブーム〉で中軸的な役割を演じたガルシア・マルケス、マヌエル・ブイグ、アルフレド・ブライス・エチェネラの長篇や、ラテンアメリカ現代詩を代表するオクタビオ・パス、パブロ・ネルーダらの詩篇を翻訳紹介しています。また、同時代のスペインでサルバドール・ダリとともにシュルレアリスム映画の基礎を築いたルイス・ブニエルの知られざる作品の数々の翻訳紹介にも尽力するなど、多方面にわたる業績が認められました。

第9回小林秀雄賞受賞

加藤陽子 大学院人文社会系研究科・文学部教授

人文社会系研究科の加藤陽子教授が、昨年刊行された著書『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』（朝日出版社）で、このたび第9回小林秀雄賞を受賞しました。



この本は、神奈川県の大光学園歴史研究部で中高生を対象に行った5日間の講義をもとにしたものです。ふだんは文学部と人文社会系研究科で日本の近現代史を教える加藤教授が、駒場での教養学部時代を経た進学振り分けのあとの、文学部に進学してきた学生だけに戦争を語るのでは遅いのではない

かという日頃の疑念に応じて、「鉄は熱いうちに打て」（同書「はじめに」）とばかりに、中高生に向けて語りかける構成となっています。

ずばり書名のとおり、1894年の日清戦争から1945年の敗戦に至るまでの半世紀、戦争を重ねる道を日本人はなぜ選んでしまったのかを、読者とともに考えるスタイルで、わかりやすく、刊行されるやたいへんな評判となりました。2002年に創設された小林秀雄賞（新潮文芸振興会）の「自由な精神と柔軟な知性に基づいて新しい世界像を呈示した作品に授与する」という同賞規定にまことにふさわしい、ユニークな歴史書です。

日本史学研究室に所属する加藤陽子教授の専門は1930年代の外交と軍事の歴史、1997年には『徴兵制と近代日本』で博士号を取得しています。1994年に助教として着任、2009年に教授となりました。

一般ニュース

本部留学生・外国人研究者支援課



平成22年度第1回「外国人留学生支援基金奨学生証書授与式」開催される

教職員ならびに卒業生の方々からの寄附金で運用されている「外国人留学生支援基金」は、平成22年度第1回奨学生（奨学金月額5万円／支給期間：平成22年4月～平成23年3月）として20名の留学生を採択し、7月28日（水）に奨学生証書授与式を開催した。



謝辞を述べる陳環さん

式は、田中明彦理事（副学長）（留学生支援基金運営委員会委員長）及び小島憲道理事（副学長）（同委員会副委員長）の臨席の下、田中理事（副学長）から奨学生に証書が授与され、「本奨学金は教職員、卒業生の方々

からの寄附金から支給されるものである。優秀な留学生の皆さんには、研究・勉学の成果を期待している」との挨拶があった後、奨学生を代表して大学院工学系研究科博士課程の陳 璟さん（中国）から、「現在の不況な社会経済情勢において、ご支援をいただき、東京大学の多くの方に支えられて勉学に打ち込める環境を整えて頂いたことを心から感謝いたします。そして、この大切な支援基金奨学金を大事に使って、より勉強と研究に集中して、研究成果で貴基金の恩恵に報いるつもりです」との謝辞が述べられた。

なお、本奨学金受給者は、前身の外国人留学生後援会から通算して今回で320名となった。ここに本基金の趣旨にご賛同いただいている皆様のご支援に対し、改めて御礼申し上げる次第である。



東京大学外国人留学生支援基金平成22年度第1回奨学生一同

一般

国際本部 日本語教育センター

日本語教育センター2010年度夏学期「集中日本語コース・学術日本語コース」修了式が行われる

日本語教育センターの2010年度夏学期「集中日本語コース・学術日本語コース」修了式（修了証書授与式）が、7月30日（金）15時30分から医学系研究科教育研究棟13階第6セミナー室で行われた。

「集中日本語コース」は、留学生が1学期間集中的に日本語を学習するためのコースで、今期は、1985年度冬学期に授業を開始した前身の組織から通算して50期目の受講生、また、本年4月に旧「留学生センター」の改組を受けて新たに発足した「日本語教育センター」としては最初の受講生であった。特に今期からは、新センター誕生に合わせて応募資格も拡大し、初級から上級まで7クラス、併設の「学術日本語コース」（日本語で論文を書くための日本語スキルを身につけるコース）の2クラスを加えて計9クラス90名という、これまで最多の受講者が4月に学習を開始した。このうち76名が所定の課程を修了し、修了式を迎えたものである。



集合写真

式には、小島憲道理事（副学長）をはじめ、修了者の指導教員の先生方と、センター関係教職員、修了者が出席した。小島理事（副学長）の挨拶に続き、菊地康人日本語教育センター長から修了者一人ひとりに修了証書が手渡され、あわせて、今期の初級クラスの出席率がいずれも90%超（クラスによっては約99%）と極めて高かったことなどを評価する講評が述べられた。

続いて、修了者を代表して、シャリファ・ソフィアさん（マレーシア、初級代表）、アハメッド・ムサビさん（アラブ首長国連邦、中級代表）、クロスビー・キャサリン・グレイスさん（イギリス、上級代表）の3名から日本語によるスピーチがあり、約4か月間の日本語のすばらしい上達ぶりに、場内からは感嘆の声があがった。

式終了後、引き続き第二食堂で懇談会が行われた。小島理事（副学長）は懇談会にも出席され、修了者たちにねぎらいの言葉をかけられた。また、指導教員を代表して渡邊雄一郎（総合文化）、泊幸秀（分生研）両先生からと、5人の留学生からのスピーチがあり、和やかな雰囲気の中で懇親会が進行した。修了者たちは、談笑し、教員を囲んで記念撮影をするなど楽しい時を過ごし、別れを惜しみつつ閉会となった。

なお、今期の修了者76名の所属・出身は、以下のとおり12研究科等、36の国または地域である。

■研究科等（12研究科等）

農学生命科学研究科	6名
工学系研究科	30名
学際情報学府	5名
情報理工学系研究科	9名
法学政治学研究科	4名
総合文化研究科	6名
人文社会系研究科	4名
理学系研究科	1名
教育学研究科	1名
公共政策学教育部	1名
新領域創成科学研究科	5名
医学系研究科	4名

■国または地域（36カ国・地域）

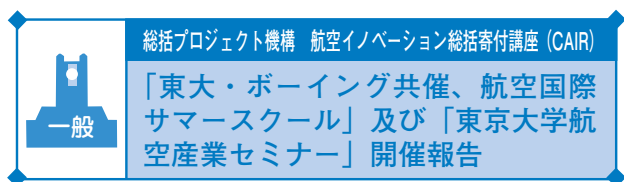
・アイスランド	1名	・タイ	11名
・アイルランド	1名	・台湾	3名
・アフガニスタン	1名	・中国	4名

・アメリカ	1名	・トルコ	1名
・アラブ首長国連邦	1名	・ナイジェリア	1名
・アルジェリア	1名	・ニューゼaland	1名
・イスラエル	2名	・ネパール	1名
・イタリア	1名	・バーレーン	1名
・イラン	1名	・ハンガリー	1名
・インド	1名	・フィリピン	2名
・イギリス	2名	・ブラジル	7名
・エクアドル	1名	・ブルガリア	1名
・カナダ	1名	・ベトナム	2名
・韓国	10名	・ポルトガル	1名
・カンボジア	1名	・マレーシア	5名
・コロンビア	2名	・メキシコ	1名
・スイス	1名	・ラトビア	1名
・スペイン	2名	・ロシア	1名



修了証の授与

修了者スピーチ



総括プロジェクト機構 航空イノベーション総括寄付講座 (CAIR)

一般

「東大・ボーイング共催、航空国際サマースクール」及び「東京大学航空産業セミナー」開催報告

8月3日(火)、4日(水)、工学部7号館において、ボーイング・ジャパンと共催で航空国際サマースクールを開催した。このサマースクールは、現在大学院生向けに開講している「航空技術・政策・産業特論」の一環として実施しているもので、昨年度は、エアバス・ジャパンと開催し、第2回となる本年度はボーイング・ジャパンに加え、日本航空及び全日本空輸(株)の協力を得て開催した。メーカーであるボーイングの技術開発や販売戦略のみでなく、運航者であるエアライン側の機材選手法や環境、CSR(企業の社会的責任)の取り組み等の広範な内容について、第一線で活躍する専門家から2日間にわたる集中講義が英語で行われた。サマースクールには、30名の学生が参加し、英語による熱心な質疑応答がなされた。また、グループスタディでは、航空機製造産業の戦略や、将来の航空機の姿、航空会社の今後の企業戦略等の課題が与えられ、各グループでそれに対する提案を発表し、優勝を競った。ボーイングが日本の大学でこうした講義を行うのは初めての試みであり、今後の東京大学との協力関係を深化させる契機となることが期待される。

また、8月25日(水)には、工学部2号館9階ディスカッションルームにおいて、社会人向けの航空産業セミナーを開催した。昨今、航空宇宙産業への参入の機運

が高まっており、全国に産業クラスターが広がりつつある一方で、航空産業への参入には、複雑な航空産業全体への理解とグローバルな規格や政府認証制度等への対応が求められ、ハードルが高くなっている。こうした中で、本セミナーは中小企業等の企業人を中心に、航空産業全体への俯瞰的な理解を深め、事業展開の一助となることを目的としたもので、当初定員30名を予定していたが、全国各地から予想を上回る申込みがあったため、定員を50名として開催した。

最初に、本セミナーを主催する東京大学航空イノベーション研究会(2008年に設立された産官学の研究会)の代表である工学系研究科航空宇宙工学専攻の鈴木真二教授から開会挨拶があった後、経済産業省製造産業局航空機武器宇宙産業課課長補佐の武尾伸隆氏から、世界の航空機産業と日本の状況について説明があり、次に、航空機製造の技術的な特徴やサプライチェーンの将来の方向性等について、三菱重工業(株)名古屋航空宇宙システム製作所飛島工場長の鈴木博氏より話があった。また、住友精密工業(株)航空宇宙技術部主幹技師の高橋教雄氏より、同社の降着装置での経験を中心に装備品市場への参入プロセス等航空機装備品事業の概要について説明がなされた。

午後には、国土交通省航空局技術部航空機安全課長の高野滋氏より、型式証明制度等の安全を確保するための仕組みや米国との相互承認制度について話があり、次に、全日本空輸(株)整備本部技術部副部長の齋藤千明氏より、エアラインの整備部門が直面している課題と航空機整備の現状について説明があった。続いて、鈴木教授より、航空技術のこれまでの進展と将来動向について話があった後、(株)三菱総合研究所経営コンサルティング本部市場戦略グループ参与の奥田章順氏より、ものづくり産業全体の視点から航空機製造業の市場やビジネスモデル、今後の方向性等について概説があり、三菱商事(株)新産業金融グループ産業金融事業本部エアラインビジネスユニットマネージャーの穴戸昌憲氏より、航空運送業のビジネスモデルとして、LCC等の動向や地域空港を活用した新たな航空運送のビジネスモデルについて話があった。最後に、まんでんプロジェクト取締役の千田泰弘氏より、中小企業の航空機関連事業への参入事例と課題について説明がなされ、セミナーは閉会となった。

今回のセミナーは初めての試みであったが、参加者からは、このように航空産業全体を俯瞰できるものは他に例がないとして、大変好評を博した。CAIRでは、今後もこうした取り組みを進め、極めて複雑な航空界全体に対する理解の深化に貢献していきたい。



8月3、4日のサマースクールの参加者



8月25日の航空産業セミナーの様子

部局 ニュース

大学院人文社会系研究科・文学部

外国人留学生・外国人研究員等との
懇親会開催される

6月24日(木)18時から、山上会館地下食堂において、恒例となっている大学院人文社会系研究科・文学部主催の外国人留学生・研究員及び外国人スタッフとの懇親会が開催された。

懇親会には、大学院人文社会系研究科及び文学部に在籍する16カ国の外国人留学生・研究員、留学生博士論文作成支援ボランティア・ネットワークである「三金会」の先生方及び教職員の計111名が参加した。

初めに小松久男大学院人文社会系研究科長・文学部長から挨拶があり、続いて藤井省三国際交流委員会委員長の発声で乾杯した後、懇談が始まった。

懇談は、終始和やかな雰囲気につつまれて進み、途中には「三金会」の先生を代表して、石平快三氏から活動状況等をふまえた留学生とのエピソードを中心に心温まるご挨拶があった。

また、前半には、国際交流室の日本語教室スタッフ等によるヴァイオリン、パーカッションの演奏とともに歌が、後半には、インドネシア留学生会による民族音楽の演奏と歌が披露され、参加者から大歓声が上がった。

最後に留学生を代表して、博士課程に在籍している台湾の王姿文さんから大変流暢な日本語でユーモアを交えながら挨拶があった。

普段は研究活動に忙しい学生・研究員のみなさまも、この日ばかりはそれぞれのお国の言葉と日本語を混ぜながら、お国自慢を語り合って友好を深め、楽しいひとときを過ごし、20時頃盛況のうちに散会した。



小松研究科長・学部長の挨拶



先生を囲んでの楽しいひととき

大気海洋研究所

国際沿岸海洋研究センター・一般公開
開催される

岩手県の大槌町にある大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターは恒例の一般公開を7月19日(月)の「海の日」に開催した。当日は天候にも恵まれた絶好の公開日和の中で開催され、大槌町のイメージキャラクター「おおちゃん」も登場して来場者を迎えた。



大槌町のイメージキャラクター「おおちゃん」

一般公開は今年で9回目を迎え、すっかり大槌町の「海の日」のイベントとして定着した感がある。子供たちに人気のタッチプール、海藻押し葉、釣り堀などの体験型企画はじめ、研究用にセンターの屋外水槽で飼育されているウミガメの観察コーナー、午前と午後2回行なわれたセンター内見学ツアー、紙芝居「おにぎりとうみ」、満員の方が興味津々に聴講した講演会「大槌のイルカの声が聞けるか?」、見学者が途切れることのなかった調査船「弥生」の公開など、どの企画も盛況であった。来場



子供達に大人気のタッチプール

者も約1200人を数え、終日センター内は子供からお年寄りまで地域の方々で大いに賑わった。来場者から寄せられたアンケートでは、「とても良かった」、「一般公開を複数回実施してほしい」、「子供ができる実験なども行ってほしい」など本センターに対する地域の方々の期待の大きさがうかがえる回答が多かった。



「弥生」には常に見学者が

生産技術研究所



「HPC 最先端シミュレーション技術に関するジョイントシンポジウム」開催

7月29日(木)、30日(金)の2日間にわたり、HPC最先端シミュレーション技術に関するジョイントシンポジウムを開催し、学内外から延べ608名に上る参加があった。

このシンポジウムは「イノベーション基盤シミュレーションソフトウェアの研究開発」プロジェクト(平成20年~24年)の開発状況と、次世代スパコンの活用を前提とした「次世代スーパーコンピュータ戦略プログラム」(平成21年度:実施可能性調査、平成22年度:準備研究、平成23~27年度:本格研究期間予定)の実行計画を紹介し、さらに、今後のものづくり分野におけるHPC(High Performance Computing)への期待と課題を議論することを目的として開催したが、HPCの産業利用に対する期待がますます大きくなっていることを実感できる結果となった。

1日目は、野城智也生産技術研究所長と文部科学省の研究振興局担当の倉持隆雄大臣官房審議官(現:研究振興局長)の挨拶に始まり、「次世代スーパーコンピュータ戦略プログラム」の次世代ものづくり戦略機関としてネットワーク型の体制のもとで推進している3機関(本学生産技術研究所、JAEA、JAXA)の代表から、それぞれの立場での成果や今後の展開についての講演が行われた。続くパネルディスカッションでは、京速度コンピュータ「京」を中核としたHPCIを利用した先端的シミュレーション技術がこれからの設計にどのように貢献できるかについて産学両サイドから、非常に白熱した議論が行われた。

2日目は「イノベーション基盤シミュレーションソフトウェアの研究開発」プロジェクトの加藤千幸研究代表(生産技術研究所教授)から開発状況の全貌について報告された後、このプロジェクトの研究開発を推進している3グループごとに、それぞれの研究テーマリーダーから開発しているソフトウェアについて詳細な報告と事例の紹介が行われた。引き続き行われた質疑応答では、産業界の第一線で活躍されている方々から、貴重かつ大変有用な意見が数多く寄せられ、熱気の冷めやらぬうちの閉幕となった。



パネルディスカッションの様子



ソフトウェアの紹介をする加藤千幸教授

大学院経済学研究科・経済学部
留学生バス旅行を実施

大学院経済学研究科・経済学部では、7月30日（金）に初めての留学生の笠間焼陶芸バス旅行を実施した。参加者は、留学生23名、引率の教職員4名の計27名であった。

当日は、雨の降るあいにくの天候だったが、出発予定時刻より若干遅れて、大型バスで本郷キャンパスを出発した。

午前中は、茨城県笠間市にある「大津晃窯」に到着し、笠間焼陶芸体験コースに参加し、指導員のサポートを受けながら、全員が真剣な面持ちで取り組んでいて、終始和やかな雰囲気での体験となった。

昼食は、笠間稲荷近くに移動し、刺身・てんぷら定食を食べた。大雨のため、笠間稲荷への散策は取りやめ、部屋でのんびりくつろいだ後、守谷市にあるアサヒビール茨城工場へ移動した。朝が早かったこともあり、多くの留学生が車内で熟睡し、ガイドさんの声で目を覚ますと、いつの間にか、快晴となっていた。同工場に到着し、玄関で集合写真を撮った後、まず自分の手でビールの原料麦芽やホップに触れ、仕込み用の釜や発酵熟成用のタンク、びん詰・缶詰の製造ラインを見学した。留学生たちは、箱詰め作業のスピードに驚いていた。その後、お

待ちかねの試飲コーナーに移動し、展望フロアでの試飲は満足の様子だった。帰りの交通は、東京までつくばエクスプレスを利用し、全員笑顔で解散した。

参加者にアンケートを取ったところ、定期試験の翌日実施は夏休み前のイベントとして最良であり、陶芸体験及び工場見学も好評であった。とくに、陶芸体験は、日本での滞在期間が長い学生にとっても、これまでやってみるきっかけがなかったということで、魅力的だったようだ。皆で体験を共有し、楽しい一日を過ごせたことは一番の収穫である。



「大津晃窯」前にて



真剣な面持ちでろくろを回しています



ビール工場入口にて記念撮影



地震研究所

一般公開・公開講義、盛況に終わる

8月3日(火)、この夏の例にもれず猛暑となった一日だったが、約700名の方々に地震研究所一般公開にお越し頂いた。15時から安田講堂で開催された公開講義にも600名ほどの来場があった。

今年一般公開は見どころが満載となり、例年より会場を拡大しての実施となった。人気の学生実験は大幅リニューアルし、初公開の鯰絵展示のほか、100年前の地震計が稼働している地震計博物館では自分のジャンプの地震計記録を持ち帰り頂いた。さらにミニ講演会ではのどを潤しながら最先端の地球科学を味わって頂いた。

20回目を迎える来年度の一般公開も、さらにご期待頂けるように取り組んでいく予定である。



学生実験「霧箱を用いた宇宙線の観察」。たくさんの来場者の前で説明する修士課程の大学院生。



技術職員のプロフェッショナル指導による工作コーナー。



学生実験「バネとブロックとベルトコンベアによる地震の観察」。来場者に解説をする博士課程の大学院生。



「学内広報」ニュース・インフォメーション記事提出要領

作成例

本部広報課

「キャンパスツアー」スタート!

本学学生がツアーガイドとなって、赤門や大講堂(安田講堂)、三四郎池、総合図書館など、本郷キャンパス内の名所旧跡を案内する「キャンパスツアー」が今年も始まった。キャンパスツアーは昨年度から実施されており、「ジュニアTA制度」に基づき応募した学生が、東京大学の歴史や学生生活のエピソードを交えながら、約2時間にわたり案内する。

今年度のスタートとなった5月14日(土)には、午前、午後合わせて43人が参加し、ツアーガイドの説明に熱心に耳を傾けていた。



広報センター前で説明するガイドとそれを聞く参加者

ツアーには、高校生以上であれば誰でも無料で参加することができる。今後のツアーは、五月祭期間や年末年始、入試期間を除く授業期間の土曜日と日曜日(10:00~12:00、14:00~16:00)に行われる予定である。



正門から大講堂に続く銀杏並木

記事の冒頭に**部局名**を記載

簡潔で分かりやすい**タイトル**を記載

- 過去の報告記事(ニュース)では「**である調**」を用いる
- 今後のお知らせ(インフォメーション)では「**ですます調**」を用いる

日付には括弧書きで**曜日**をつける

- 写真を掲載する場合は、25文字以内で**キャプション**(写真の説明文)をつける。写真は3枚程度まで
- 原稿とは別に、JPEGなどの形式による元の画像ファイルを別途送付する(プリントの写真は学内便で送付)

句読点は「**、**」「**。」**を用いる

時間は**24時間表記**とする

- 記事は一行25文字の書式で作成する。
- 文字数は800字を目安とするが、内容によって増減は可とする。
- 人物名は**フルネーム**で表記すること。

提出上の注意

1. 提出方法

記事は、各部局の広報担当者を通して、メールの添付ファイルとして送付すること。
(学内広報担当者の個人アドレスではなく、必ず下記のアドレスに送付してください。)

2. 締切日

HPで発行スケジュールを確認すること。
http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html
トップページ>広報・情報公開>学内広報

問い合わせ先・提出先

本部広報課広報企画チーム
内線 22031

E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

※原稿を受け取った後、学内広報担当者から、必ず**受領メール**をお送りしています(概ね1週間以内)。返信メールが届かない場合は、何らかのトラブルで原稿を受け取れていない可能性がありますので、**その際はお問合せ願います**。

★ASIAN DIVERSITY★

No. 1

—「男は女より偉い？ イスラームの視点から」—

東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク (ASNET) では毎週木曜日夕方にセミナーを開催しております。このコーナーでは、当セミナーでの報告を紹介する形で、アジアに関する様々な研究をご紹介します。第一回は後藤絵美氏 (日本学術振興会、特別研究員) による、「イスラームの女性観—男女の優劣をめぐる啓示解釈を中心に—」(2010年6月24日開催) です。

イスラーム社会の女性という、皆様はどのような印象をお持ちでしょうか。イスラームは女性に厳しい宗教なのか、それとも優しい宗教なのか。イスラームの女性観をムスリム知識人の言葉から検討していく、というご報告でした。

「男性は女性のカフワームである」、「男性は女性の一段上にある」。クルアーン (コーラン) のこうした言葉について、近代から現代に至るまで、様々な解釈がなされてきました。ムスリム知識人の間では近代に入っても、この言葉を解釈するにあたって、「男性は女性よりも優位にある」ことを示したものだ、という見方が優勢でした。19世紀に入り、ムハンマド・アブドゥという学者は、男女の格差を夫婦関係に限定することで、それまでの解釈を大きく変えたそうです。

その後、20世紀に入り、サイイド・クトゥブという思想家が、家族という社会集団の中で、男女が異なる役割を担っていることを示すものだという解釈を提示しました。更に、アミーナ・ワドゥードという在米の女性学者が、クトゥブの見解を受け継ぎつつ、更に斬新な解釈を打ち出しました。男女は『同等』であり、男女の違いは女性のみが子供を妊娠し、出産することができる、という点である。このとき、「男性は女性のカフワームである」という言葉は、女性を精神的、知的、物質的に女性をサポートすることである。しかし、これらは責務ではなく、あくまで個人が心がけるべき、姿勢である、と。

後藤氏の発表に対して、「学者の解釈には、実際のイスラームの女性観がどのくらい反映されているのか」、「解釈の変容はイスラーム社会の変容とどの程度、相互関係があるのか」などの質問がなされました。ワドゥードの解釈は現代のイスラームにおいても必ずしも優勢ではないそうです。ムスリム女性の社会進出や服装の変化といった社会的な変化を、宗教言説の変化から検討していきたい、というのが後藤氏の展望だそうです。このセミナーの詳細は下記のURLをご参照下さい。

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/6913>



日本・アジアに関する研究教育ネットワーク (ASNET) 安田佳代

★ASIAN DIVERSITY★



第11回 学生インタビューを受けました

某日、オフィス宛に学生さんよりインタビュー依頼のメールが届きました。依頼主は農学生命科学研究科の大学院生 松葉史紗子さんです。9月にドイツで開催される環境学生会議で発表する為、大学の環境問題への取組について調査しているとの事。リユース事業の目的には「エコ・キャンパス化への貢献」という面もあるので、インタビューに協力する事になりました。



3Rでエコ・キャンパス化

当日、どんな事を聞かれるのだろうかという緊張と期待と共にインタビューがスタート。松葉さんはウェブサイトやコラムを読んで予習をして来てくれたようで、インタビュー中、積極的な質問が沢山ありました。「事業を始めたきっかけは?」「やりがいや苦労した点は?」「PCの回収率は?」「予算は?」...中でも印象的だったのは「環境問題に取り組む学生団体、他大学や企業と協同して行っている事はありますか?」という質問でした。学生団体とは京都大学の学生さんと意見交換する機会がありましたが(学内広報 1398号参照)、他大学や企業と協同して何かをするという事はまだありません。本事業が稼働して2年目に入り、学内での周知や仕組みの改善などやるべき事はまだまだあります。それに加えて、色々な所と連携した新しい事へのチャレンジもまた有意義だな、と熱心な学生さんの姿を見て思うようになりました。

今回の松葉さんや、京大の学生さんなど、本事業を通して環境問題に関心の高い学生さんと話す機会に恵まれました。熱意を持って取り組んでいる学生さんとやりとりしていると、質問を受けている私達の方が新たに気づく事も沢山あります。私達もより良い学生支援が出来るよう、様々な形で事業を進化させていきたい、そんな事業の在り方も改めて考えさせてくれたインタビューでした。(高)



インタビューアの松葉さん

☆8月各部署ご提供PC☆

宇宙線研究所 1台	文学部 1台
地震研究所 2台	工学部 5台
採用試験事務室 12台	附属図書館 9台

以上30台のノートPCは4回目の募集時に利用させていただきます。どうもありがとうございました。引き続きよろしく願いいたします。

- 問い合わせ先: ノートPCリユースオフィス (本部資産管理部資産課内)
E-mail: pcreuse@adm.u-tokyo.ac.jp
URL: http://pcreuse.adm.u-tokyo.ac.jp/
内線: 22135 (担当 小川・高橋・戸田)
- ノートPC回収先: 美津野商事株式会社システム事業部
E-mail: reuse@mizuno.net (担当 川崎・石井)
電話: 03-3943-0181 FAX: 03-3943-4180



ケータイからみた東大 ～帰ってきた東大ナビ通信！～No.3

アメリカ大学事情 (3) ～米国公立大学の財政問題

大学総合教育研究センターで助教をしております、重田勝介と申します。携帯電話を使った教育情報サービス「東大ナビ」を運営しております。今回は引き続き「アメリカ大学事情」ということで、私がカリフォルニア大学バークレー校で昨年経験した、公立大学の財政事情の悪化に対する対応や、学費値上げに対する抗議運動などをご紹介します。

2008年に起きたリーマンショック以降、米国の公立大学は州からの補助金が削られ、財政的窮地に立たされています。米国内でも景気悪化が深刻であるカリフォルニア州では影響も大きく、私が滞在していた2009年にはキャンパスでも数々の混乱がありました。

私がバークレー校に赴任したのは8月末でしたが、帰国した翌年3月頃までの間に計3回のデモ運動がありました。そのうち2回は2009年9月と11月に起こったもので、学費の値上げ(州内からの学生で25%増)に反対する学生によるデモでした。その中でも11月のデモは大規模で、学生がキャンパス内の通りを列をなして塞ぎ、学生や教員に講義を欠席・中

止するよう呼びかけるものでした(写真1)。同時にデモ隊の一部は講義棟の一つを占拠し、学内の警察隊に加え地元の警察も出動する騒ぎとなりました。結局、その日は講義も学内サービスも休止となり、私もデモ運動を横目に見つつ帰宅しました。また翌年3月に起こったデモ活動は、教員や職員、学生が共に州都のサクラメントや近隣の事務所をパレードし、州からの補助金カットを止めるように訴えるものでした。それ以前のデモ活動は学生が大学に訴えるものですが、今回は大学が学生と一体になり、問題の元である州の政策に対して訴えるものでした。

これらの活動は一部の過激な集団が担ったものというよりは、教員や職員、学生が共に「Public Educationを守らねばならない」という意志のもと、キャンパスの共通認識に支えられて続いたもののよう、私には見えました。デモのたびに学長からキャンパス内に、大学の窮状を説明し、感情的な行動を避けて困難を乗り切ろうという一斉メールが送られましたし、教員や職員は無給休暇



写真1: 学生によるデモ活動

を取り経費削減を目指す取り組みに参加していました。この取組は1年にわたりましたが、これにより人件費の4-10%を削減することができました。

次号では私がおりました、ETS(Educational Technology Service)の組織と活動についてご紹介いたします。

【参考URL】

Year-Long UC Furlough Program Ends - The Daily Californian
http://www.dailycal.org/article/110176/year-long_uc_furlough_program_ends

東大ナビとは？

学内外に向け携帯電話を通じて教育イベント情報をお届けするサービスです。携帯サイトで学術俯瞰講義や公開講座、学内で開催される教育イベント情報を宣伝します。加えて、QRコードや空メール送信によりメールアドレスを登録した皆様の携帯電話に、最新の教育イベント情報を、メールマガジンで定期的にお届けしています。

イベント情報を受けたい方

mail@utnav.jpに空メール送信！

- この記事のQRコードから
- mail@utnav.jp宛てにメール送信
- 携帯サイトutnav.jpにアクセスしてメルマガ登録ページへ

※携帯電話・PCどちらからも登録可能

返信メールから登録画面へ入力！

- ご所属
- 性別・年齢など

登録完了！

- 登録確認メールが届きます
- 隔週でメルマガ・お得なクーポンGET!

イベントを宣伝したい方

携帯・PCサイトで申し込めます

- http://utnav.jpにアクセス
- イベント掲載フォームから送信！
- 追ってスタッフよりご連絡致します

教育企画室TREEオフィスまで！

- 内線：27823 (重田)
- メール：info@tree.ep.u-tokyo.ac.jp
- オフィス：本郷キャンパス 第二本部棟403号室



東大ナビ
はじまる

ケータイでお得なイベント情報をGET!
詳しくはmail@utnav.jpにアクセス。
またはmail@utnav.jpにメール。
東大ナビ 教育企画室

※この連載では、政策ビジョン研究センターが現在最も重要視しているトピックスを中心に、そのときどきのホットニュースを、当センターの取り組みの様子、活動状況などと共にご紹介していきます。

研究の現場と社会をつなぐ橋渡し

新センター長からのメッセージ



センター長 城山 英明(教授)

8日1日をもって政策ビジョン研究センター長に就任いたしました。総合大学である東京大学の利点を活かし、社会の多様な関係者の課題意識を踏まえて、関連する科学技術

研究や人文社会科学の最先端研究を突き合わせ、十分なデータと論理に基づいた、課題の分析と解決のための政策の選択肢を提示すること、そしてそれらの研究成果を政策に関心をもつ一般の方が理解でき、現実の社会の改善に結びつくような形に加工し、

発信することが当センターのミッションです。

最近では政策形成プロセスの透明化が進み、従来人々の目に触れることのなかった、政策決定プロセスの有り様が開示されることになり注目を集めました。同時に実質的な政策判断の基準や根拠に対する疑問を、世に投げかける結果ともなりました。エビデンスに基づいた政策の立案、および政策の優先順位を規定する論拠が求められる中、十分なデータと論理に基づいて多面的観点から行われる政策議論へのニーズは、ますます高まっているといえます。

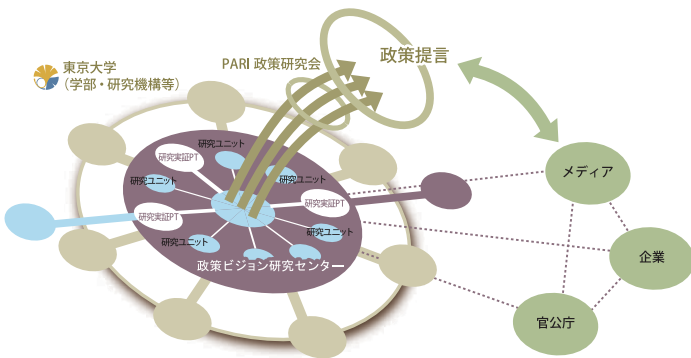
多様な情報を踏まえた政策発信

また、そうした議論をわかりやすい形で伝えるインタープリターの役割も重要です。多様な情報を構造化して提示することによって問題点を明確化し、政策・制度や技術社会システムの多様な便益やリスクをバランスよく評価して、社会意思決定にフィードバックするメカニ

ズムが、今まさに求められていると思います。

Policy Alternatives（政策の選択肢）を研究するセンターとして、多様な研究の現場と社会をつなぐ橋渡しとなり、研究者間はもちろん、民間企業、メディアやNPOといった様々な民間機関の方々とも連携しながら、新しい政策の選択肢を提示できるよう努めてまいりたいと思います。

現在、当センターでは、テーマ毎に研究ユニットが発足し、それぞれの課題に応じた研究会やシンポジウムを通して研究成果の発信をしています。今後、様々な媒体を使って政策の研究・提言活動を展開していくつもりです。学内において社会への政策発信の必要性を感じておられる方や、学外から東京大学のこのような活動に関心を持たれている方のご支援・ご協力を期待しております。



高齢者・医療系	高齢社会	<ul style="list-style-type: none"> ● COCN 合同 高齢化社会研究会 ● 市民後見研究ユニット
	医療情報	<ul style="list-style-type: none"> ● 市民後見・教育研究実証プロジェクト
	医療機器	<ul style="list-style-type: none"> ● 医療におけるIT政策研究ユニット ● 地域医療情報化研究実証プロジェクト ● 医療機器の開発に関する政策研究ユニット
イノベーション系	知的財産権とイノベーション	<ul style="list-style-type: none"> ● 知的財産権とイノベーション研究ユニット
	技術ガバナンス	<ul style="list-style-type: none"> ● 技術ガバナンス研究ユニット
	航空政策	<ul style="list-style-type: none"> ● テクノロジーアセスメントプロジェクト ● 航空政策研究ユニット
グローバル系	アジア	<ul style="list-style-type: none"> ● 北東アジアの安全保障研究ユニット

政策ビジョン研究センター活動マップ (2010年9月現在)

地域医療情報化研究実証プロジェクト 地方で実証研究を開始

高齢化に伴い、日本の医療負担は急増しています。今、改革をしないと団塊の世代が75歳に達する10数年後には、日本の医療は崩壊するのではないかとされています。政策ビジョン研究センターでは、日本の医療をより効率的で、質の高いものにすべく山形県や徳島県などで実証研究に取り組んでいます。

日本の医療を改革するため、当センターの地域医療情報化研究実証プロジェクトが取り組んでいるのが、インフラ整備です。医療制度を改革するには、医療の現状を正確かつ客観的に把握することが重要と考え、IT技術を活用した医療情報インフラ構築に注力しています。

例えば、山形県では、診療・看護、会計、

物流など、これまでの医療情報システムでは別々に取り扱っていた情報を一元的に取り扱うことができる、最先端の医療情報システムの導入に取り組んでいます。

従来のシステムは、動作が遅い、システムダウンが起こるなどの理由により、十分に医療現場に浸透したとは言えないのが現状です。また、これまでのシステムではリアルタイム処理ができなかったために、「処置中止」のオーダーが処置後に届くこともあり、非常に危険であったことも医療現場に浸透しなかった理由の一つです。

当センターの秋山昌範教授は、最先端のクラウド技術を利用し、この問題を解決するシステムを開発しました。今後地域でこの最先端システムを導入し、どの程度医療事故を減らし、病院経営を効率化できるかの実証研究を行う予定です。

また、糖尿病の死亡率が全国で最も高い徳島県では、1患者1カルテを実現し、病院・診療所・保健センターなどの医療福祉機関が連携することで包括的な糖尿病予防・管理を可能にするための医療情報インフラを構築しています。長期的には、システムに蓄積された患者データを分析し糖尿病予防・治療に役立てるといった研究にも取り組む予定です。

当センターでは上記に加え、個人情報保護の観点から、関係する法律に基づいた必要十分な匿名化の方法と、同意取得の手続きに関する研究も行っています。こうした内容を踏まえ、医療法制度に関して積極的に提言を行い、日本の医療制度改革を実現するために活動しています。

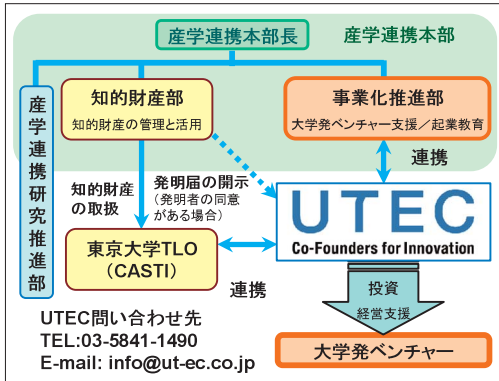
http://pari.u-tokyo.ac.jp/policy/index_6_iryoit.html
詳細は当センターHPをご覧ください。

<http://pari.u-tokyo.ac.jp>

産学連携本部、関連組織のご紹介

(株)東京大学エッジキャピタル

東京大学の全学的産学連携体制は、産学連携本部と密接な連携関係にある2社(株)東京大学エッジキャピタル・(株)東京大学TLO)とによって組織全体が構成されています。第1回目の今回はそのうちの1社、(株)東京大学エッジキャピタルをご紹介します。



産学連携本部と密接に連携した活動

(株)東京大学エッジキャピタル(以下UTECE)は、2004年4月の国立大学法人化・産学連携本部の発足と合わせて設立されて以来、東京大学が「技術移転関連事業者」として認定する唯一のベンチャーキャピタル(以下VC)であり、大学発ベンチャーへの投資・支援活動を行っています。VCは外部の金融機関等から出資を募り、ファンドを組成して投資を行います。UTECEも2004年に募集した1号ファンド、今年6月に募集を完了した2号ファンドから投資を行っています。投資案件の発掘に際して発明者の同意の下で発明届の情報を共有したり、知財戦略を議論したり、投資先企業にインキュベーション施設を提供したりするなど、産学連携本部・(株)東京大学TLOと密接に連携して活動しています(左図参照)。一方、UTECEは他のVCとは異なり、売上や利益が立っていない技術の「種」の段階や創業間もない段階の案件を中心に投資を行っており、会社を作る以前に投資

を決定する場合もあり、投資先企業に対して成長に合わせた追加投資や、東京大学内外の他の関連技術を組み合わせることで、より競争力を強化していくような(テクノロジー・ロールアップ)支援を行っています。

2号ファンドは投資を開始したばかりですが、1号ファンドからは34社へ投資を行い、2009年3月にはUTECEが主体となって創業間もない段階から投資・支援した企業としては初めて、東京大学医科学研究所発ベンチャーのテラ(株)が株式公開を果たしました。テラ社に続きまして、下記で紹介しております(株)モルフォなどの既存投資先企業へも積極的に支援を行い、その成長を後押しすると共に、新たな投資案件の発掘にも全力を注いでおり、その成果に大きな期待が寄せられています。

起業支援プログラムUTECE EIR (Entrepreneurs In Residence)

UTECEでは、技術を基にした起業活動のさらなる活性化と新たな投資案件の発掘を目指して、UTECE EIRという起業支援プログラムも運営しています。これは、投資前の段階でも知財の活用に向けた検討や技術コンセプトの検証、市場調査、事業計画の立案等を支援するもので、アントレプレナープラザ内のインキュベーション施設を提供しています。ご関心のある方は、ぜひUTECEまでお問合せください。

Column 東大発ベンチャー企業におじゃまして~す!

今回はアントレプレナープラザ5階に入居している(株)モルフォを訪問しました。フロアに入って驚いたのは人数の多さ。起業した2004年に4人だった社員が6年で約70名に。ここ以外にも近くにサテライトオフィスを借りているそうです。

(株)モルフォの技術は、主に携帯電話のカメラ向けソフトウェアとして製品化されています。手ブレ補正、パノラマ画像生成、ワンセグ動画のフレーム補間等があり、これまで携帯電話204機種に採用されています。なんと累計販売ライセンス数は2億を越すとのこと。

今でこそ軌道に乗ったビジネスですが、起業して2年間はほとんど売上げがなかったそうです。そのときの様子を平賀社長は次のように語ってくれました。「起業後まもなく、UTECEに出資していただきました。通常のベンチャーキャピタルだとすぐに成果を求めてくるのですが、UTECEからは『最初は売上げがなくてもいいから』と言ってもらえ、中長期的なスパンで当社のことを見てくれたことに今でも大変感謝しています。当社の将来を信じて勇気ある選択をしていただいたと思っています」また、学生さんへのメッセージとして「専門的な知識や研究で培った経験をもつ優秀な人こそ、ぜひベンチャー企業でがんばってほしいです。自分自身が秘めている可能性を見つけるためにも、ぜひ就職先の1つにベンチャー企業という選択肢を入れてください」とお話しいただきました。



代表取締役社長: 平賀督基

本社: 東京大学本郷キャンパスアントレプレナープラザ5階

設立: 2004年5月 <http://www.morpho-inc.com/>

事業内容: 画像処理技術の研究開発・製品開発・ライセンス



アントレプレナープラザの前で、平賀督基社長(最前列中央)を囲む株式会社モルフォのみなさん

連絡先: 産学連携本部 (本部産学連携グループ)
電話: 内線22857 (外線03-5841-2857)
WEBサイト: <http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

DUCR

検索

DUCR
Division of University Corporate Relations
The University of Tokyo

■新商品紹介☆

今話題の理学系研究科附属天文学教育研究センターが推進している東京大学アタカマ天文台(TAO)計画ですが、計画の口径6.5メートルのTAO望遠鏡設置に先だって本年7月7日に口径1メートルの「mini-TAO」望遠鏡が設置されました。

世界で最も高い場所において天体観測が開始されることを記念してチリ郵便局より記念切手が発行されました。

記念切手には東京大学の名称が表されており、日本・チリ両国の国旗、旧東大マークをデザインして配するなどTAO計画に対するチリ政府の期待の大きさが感じられるデザインとなっています。

コミュニケーションセンターでは現在、当切手を販売中です。数量限定で大変貴重な切手ですのでこの機会をお見逃ししないようお願い致します。

また、コミュニケーションセンター内展示スペースでは東京大学アタカマ天文台(TAO)計画に関する展示を行っており、みなさまからの応援メッセージ募集しておりますので是非1度お立ち寄り下さい。



単片切手・シート・封筒3点セット :3,150円
特製ファイル :10,500円

左図は、単片切手

■スタッフオススメ商品紹介☆



医学系研究科
国際地域保健学
修士課程2年 陸名真弓

皆様こんにちは！スタッフになって半年の陸名です。私の最もオススメの商品は「体力式アミノ酸」です！スタッフになってすぐ、88歳の祖母にプレゼントしたところ「元気が出る！」と気に入って毎日飲んでいました。

私と母も疲れが溜まった時、朝1包飲み、元気に一日を過ごしています。

みなさまもお疲れの時、元気を出したい時、是非試されてはいかがでしょうか。

担当：UTCC吉岡



東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

The University of Tokyo

OPEN：月曜～土曜 10：00～18：00

電話：03-5841-1039

http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp/



主催者とメンター

真船文隆

総合文化研究科 准教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門

2010年7月19日から28日の10日間にわたって、東京近郊で国際化学オリンピック日本大会が開催された。本年度は68カ国から270名弱の高校生が参加し、過去最大規模。生徒たちは、この10日の間に、化学実験、引き続いて筆記試験に挑戦し、総合点でメダルを争った。実験課題は早稲田大学、筆記試験は東大の駒場キャンパス5号館で行われた。我々化学系の教員の一部も、尾中篤総合文化研究科教授の指揮のもとで筆記試験の実施に関与し、貴重な体験をさせていただいた。

駒場キャンパス5号館は耐震補強のために数年前に全面的に改修された建物であり、アカデミックな雰囲気の中、生徒は試験に集中できたに違いない。生徒たちは、朝9時から5時間連続の試験を受けたあと、生協食堂で遅い昼食をとり、実験課題、筆記試験のプレッシャーからの開放感を思い思いに楽しんだ。ある生徒は、自然豊かなキャンパス内を散策し、また別の生徒は生協購買部で東大グッズをお土産として購入した。

主催者および各国のメンター(高校生の世話役)には、まだ重要な仕事が残っている。採点および得点交渉である。化学のみならず、国際○○学オリンピックは、さまざまな意味で民主的なコンペティションである。出題範囲には取り決めがある。採点も、主催者とメンターが別個に行う。その間に差がある場合(必然的に、メンターによる採点結果の方が高い場合のみ)、メンターが出題者に対して不服を申し出ることができる。もう一点、化学オリンピックはあくまで「ケミストリー」のセンスを問うという原則がある。解答は明らかに間違っている、その中にある「ケミストリー」が正しければよいという認識が共有されている。採点も難しいし、交渉も楽ではない。メンターとしては、ケミストリーを十分に理解したうえで、どう交渉に持ちこむかが重要である。

中には正答(d)に対して、(a)と書いてある答案について、「我が国ではこれをdと読む」と言い張った国や、例えば、 $3 \times 6 = 18 \times 5 = 90 - 52 = 38$ のような式を書いて、「我々の小学校ではこのように教える」と言い切った国もあったようだ。確かにケミストリーは正しいかもしれないが、それ以前に問題があるような気がする。ただ、それでも言い張れるメンターの性格はうらやましい。もちろん、声の大きいメンターの国が有利になるようなことはなかったし、とりわけ優秀な生徒は、すでに高い得点をとっていたので、得点交渉の対象にすらならなかった。

★科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>

事務長二年生、まだまだガクシュウ中！

地震研究所に事務長として着任して早くも2年。今日もどこかで地震、火山噴火、津波が起きていないか情報確認は欠かせない。赴任して日も浅い去年のこと。休暇中の早朝に、駿河湾を震源とするかなり大きな地震が発生。大したことなからうと、惰眠を貪っていたが、家族から何度も携帯が鳴っていたとの報告を受け、慌てて着信履歴を見てびっくり！！所長からの緊急対策会議招集の連絡。残念ながら地震は時も場所も選んでくれないのだ。以来、休日も就寝中も「いざ鎌倉！」とばかりに駆けつけられるよう、携帯電話が離せなくなった。

そんな緊張感が密かに漂う研究所の事務スタッフは非常勤も含め全部で約40名と少数精鋭。先生方や学生の教育研究に支障なく、効果的な業務運営を行うため、人材を指導、育成し、健康面でも管理することが、一番大事な「ワタシのオシゴト」である。職員がいつでも相談に来られるよう明るく風通しの良い職場環境創りを心掛けている。

さて、そんな事務長としての当面の課題は、行動シナリオの重点テーマである職員の英語力アップ。「英語は世界一簡単な言語である故、世界中に広まった」という某部長のお言葉に頷きつつも、ワタシ自身、中学から大学まで8年間も英語を勉強したが、全く身に付かず。たまに英語で行われる所内会議は蚊帳の外(汗)。幸い学内で係長、主任を対象とした初心者向け英語研修が企画され、これを機会に一人でも多くの職員が英語を身に付けてくれたらと期待している。某企業のように社内公用語が英語になり、名前はニックネームで、幹部会議は英語のみ、TOEIC800点以下は降格...なんて時代が東大にも近い将来やってくるかもしれない。



ちょっぴり
広い執務室



事務スタッフと
2Fラウンジで
(女性スタッフの
多さが目立つ)



地震観測点アクアライン「風の塔」(後ろは平田所長)

得意ワザ：天然ボケ？
 自分の性格：物事に拘らない
 次回執筆者のご指名：青木志帆さん
 次回執筆者との関係：小田急線友の会
 次回執筆者の紹介：“Madam”の異名と
 今流行りの“女子力”を持つ仕事人

FOREST

行動シナリオの
「今」をレポート

NOW 「行動シナリオ 部局説明会」 始まる



行動シナリオのより一層の浸透を図るため、濱田総長による「行動シナリオ 部局説明会」が始まりました。第1回目は9月1日。教育学研究科の運営会議メンバーの教職員を対象に、行動シナリオの説明や、意見交換が行われました。

冒頭に行われた総長からの説明では、「総長に就任したときの所信(※)に込めた思いが行動シナリオという形に発展した」と、行動シナリオの成り立ちが紹介されました。そして本学が取り組むべき課題についての基本的な考え方が重点テーマごとに説明されました。

その後の意見交換では、教育学研究科のメンバーから、「タフな東大生の育成」に関連して、「近年は、優秀な学生が研究者を目指さず、企業等に就職してしまうため、優秀な研究者を養成することが難しくなっている。どうすればいいか部局を越えて自由に議論する場が欲しい」、「グローバルに活躍できる人材を養成するために、優秀な学生を国内外から獲得したり、海外派遣を促進したりするような新たな枠組みを検討することが必要」などの問題提起がなされ、総長との間で活発な議論が交わされました。

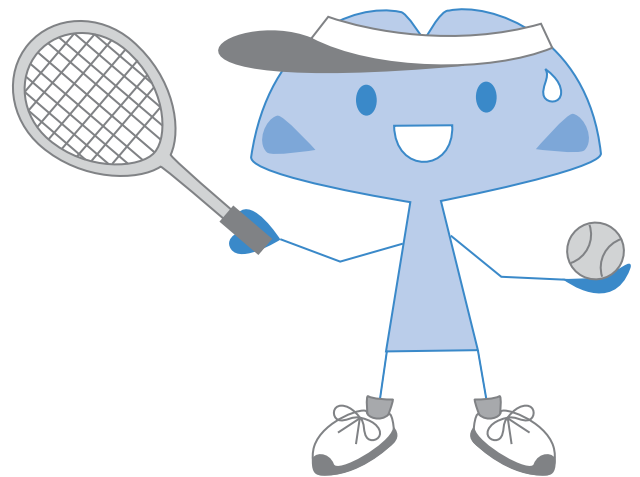
濱田総長の行動シナリオの特色のひとつは、各部局が「部局別行動シナリオ」の策定という形で参画していることです。部局と本部とが相まって行動シナリオを実施するためには、お互いのコミュニケーションがとても重要になります。総長自らが部局に赴いて説明を行い、現場の生の声に触れることは大きな意味を持ちます。部局説明会は来年の2月まで、計27部局で行われる予定です。これから訪問を受ける部局のみなさま、ご期待ください！

(※)『森を動かす。世界を担う知の拠点へ』

(http://www.u-tokyo.ac.jp/gen01/b01_09_j.html)

行動シナリオを読もう！
<http://www.u-tokyo.ac.jp/scenario/>

【お問い合わせ先】本部企画課(内線22393)



INFORMATION

お知らせ

お知らせ

情報基盤センター

10月新コース「はじめての論文の探し方」ほか “情報探索ガイダンス”各種コース実施のお知らせ

レポート・論文・ゼミ発表で、文献探しや文献整理に困っていませんか？

情報基盤センター図書館電子化部門では、“情報探索ガイダンス”各種コースを実施しています。

実際にパソコンを操作しながら実習するので、わかりやすいと大変好評です。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

■ 10/6 (水) 12:10 ~ 12:30 自宅から検索するには？
(20分のワンポイント講習会)

自宅からデータベースや電子ジャーナルを使う方法だけ、知りたい。そんな方にお奨めなのが、このコース。ECCS アカウント認証による SSL-VPN Gateway サービスを紹介します。

■ 10/8 (金) 16:00 ~ 17:00

10/27 (水) 15:00 ~ 16:00 (10/8 と同内容)

はじめての論文の探し方【新コース】

「文献検索は初めて」という初心者の方に向けて、文献リストの読み取り方、図書、雑誌、日本語論文 (CiNii)、英語論文 (Web of Science) の基本的な探し方、自宅からデータベースや電子ジャーナルを使う方法を実習します。「文献検索早わかりコース」に参加した方は受講不要)

■ 10/12(火)16:00~17:00 EndNote Webを使うには？

Web版の文献管理ツール「EndNote Web」の基本的な使い方を説明します。データベースからのデータの取り込み方、参考文献リストの自動作成方法などを実習します。

■ 10/14 (木) 11:00 ~ 12:00 RefWorksを使うには？

Web版の文献管理ツール「RefWorks」の基本的な使い方を説明します。データベースからのデータの取り込み方、参考文献リストの自動作成方法などを実習します。

■ 10/15 (金) 12:10 ~ 12:40 日本の論文を探すには？
(30分のクイック講習会)

日本国内の雑誌論文の代表的なデータベース「CiNii」(サイニイ)の使い方をコンパクトに解説します。

■ 10/26 (火) 16:30 ~ 18:00 (農学生命科学図書館共催)
レポート&論文作成対策講習会 第2弾！

～日本語文献の探し方 + EndNote Web～

6月の第1弾に続き、今回は、国内論文の代表的データベース「CiNii」(サイニイ)を使って日本語文献を探す方法と、Web版の文献管理ツール「EndNote Web」の基本的な使い方を教えます。初めてでも大丈夫！

【会場】農学生命科学図書館 本館3階PC端末室
(農学生命科学研究科・農学部所属でない方も参加可能)

■ 10/29 (金) 15:00 ~ 16:00

留学生向け「OECD iLibrary」講習会 (English)

【10月限定コース】

OECDの出版物・データベースをすべて収録したデータベース「OECD iLibrary」の講習会です。統計データを探し、エクセル形式でダウンロードできます。

提供元から講師をお招きして、英語での講習をします。この機会をお見逃し無く！

月	火	水	木	金
10/4	10/5	10/6 12:10-12:30 自宅から 検索する には	10/7	10/8 16:00-17:00 はじめての 論文の 探し方
10/11	10/12 16:00-17:00 EndNote Web を使うには	10/13	10/14 11:00-12:00 RefWorks を使うには	10/15 12:10-12:40 日本の論文 を探すには
10/18	10/19	10/20 15:00-16:00 留学生向け ガイダンス (中国語)※	10/21	10/22
10/25	10/26 16:30-18:00 レポート& 論文作成 対策講習会	10/27 15:00-16:00 はじめての 論文の 探し方	10/28	10/29 15:00-16:00 OECD iLibrary (English)

(※) 10/20 は別記事「中国語で講習します！留学生の

「はじめの論文の探し方ガイダンス」参照

●会場：本郷キャンパス総合図書館1階講習会コーナー
(10/26は農学生命科学図書館本館3階PC端末室)

●参加費：無料

●予約不要 各回先着12名。直接ご来場ください。

●ご希望の日時・内容でオーダーメイド講習！
オーダーメイドの講習会を、随時承っています。(無料)
詳細は下記サイトをご参照ください。

(<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.html>)

●Litetopi メールマガジン発信中！

本学所属の方を対象に、データベースのニュースや講習会のご案内などをお届けします。(無料)

配信ご希望の方は、下記アドレスまでメールでご連絡ください。



literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

●お問い合わせ：

学術情報リテラシー係 03-5841-2649 (内線：22649)

literacy*lib.u-tokyo.ac.jp

(*は@に置き換えて送信してください。)

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>



お知らせ

情報基盤センター

中国語で講習します！「留学生のためのはじめの論文の探し方ガイダンス」

情報基盤センター図書館電子化部門では、中国語で、「留学生のためのはじめの論文の探し方ガイダンス」を開催します。

内容は、レポート・論文作成に役立つ、データベースを使った図書や雑誌論文の検索実習です。

実際にパソコンを操作しながら実習します。

入門的な内容ですので、新入学の留学生に限らず、中国語での講習を希望する初心者の方の参加も歓迎します。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

●講習内容

・図書の探し方 (東京大学 OPAC、Webcat)

・雑誌論文の探し方 (電子ジャーナル、東京大学 OPAC)

・あるテーマに関する論文の探し方 庫

中国語論文：中国期刊全文数据库 (CNKI)

日本語論文：CiNii

英語論文：Web of Science

・自宅からデータベースや電子ジャーナルを使う方法

●会場：

本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー

●日時：10/20 (水) 15:00-16:00

詳細は下記のサイトをご覧ください。(中国語)

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/c/training-c.html>

●参加費：無料

●予約不要

先着12名。直接ご来場ください。

●お問い合わせ：

学術情報リテラシー係 03-5841-2649 (内線：22649)

literacy*lib.u-tokyo.ac.jp

(*は@に置き換えて送信してください。)

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/c/training-c.html>



お知らせ

附属図書館

平成 22 年度冬学期総合図書館備付け図書の推薦について

総合図書館では、学生の学習・研究を助け、また教養をより豊かにするために、全学の教員（常勤講師以上）から図書を推薦していただく制度を設けております。

つきましては、平成 22 年度冬学期に向けて下記のとおり図書の推薦をお願いいたします。

1 推薦の範囲

(1) 講義に密着した図書は、本郷キャンパスの講義を対象とします。

(2) その他、学生の教養書としてふさわしいものをご推薦ください。

ただし、雑誌および学生にとってあまりに高度な専門図書は除いてください。

2 推薦締切り

講義に密着した図書は、平成 22 年 10 月 29 日（金）その他の図書の推薦は常時受け付けます。

3 推薦方法

総合図書館備付け図書推薦要領によります。

※推薦要領は、各部局図書館（室）に備付けております。

4 問合せ先

附属図書館情報管理課選書受入係

内線：22626

e-mail：sen@lib.u-tokyo.ac.jp

* 附属図書館 Web サイト

(<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/>)

上記サイトの「ニュース」にある「総合図書館備付け図書の推薦について（10/01）」もご参照ください。

お知らせ

大学院理学系研究科・理学部

第 18 回理学部公開講演会 「情報と物質～世界を決める 2 つの要素」

我々を取り巻く自然界の成り立ちとしくみを調べるのが理学の究極の目的です。そのためには自然を構成する物質とそれが表す情報の両方を知り、その関係を明らかにすることが重要です。今回は、これらを直接の対象としている研究の中から特に興味深い 3 つの話題を取り上げます。化学・情報科学・物理学での最新の研究成果が日常生活とどのような繋がりを持つのかもご紹介いたします。

日時： 11 月 7 日（日）14：00～16：40（13：00 開場）

* 終了後、講演者との歓談の時間を設けます。

会場： 本郷キャンパス 安田講堂

入場： 無料 事前申し込み不要
どなたでもご参加いただけます。

定員： 700 名（当日先着順）

講演内容：

「光で ON - OFF する物質を創る」

大越 慎一（理学系研究科化学専攻 教授）

「モデルと本物：化学と生物学の場合」

萩谷 昌己（情報理工学系研究科長・理学部情報科学科教授）

「原子核の新しい顔」

大塚 孝治（理学系研究科附属原子核科学研究センター長・物理学専攻教授）

中継：インターネット配信を予定。

主催・問い合わせ先：

大学院理学系研究科・理学部広報室

TEL：03-5841-7585

E-mail: kouhou@adm.s.u-tokyo.ac.jp

URL:<http://www.s.u-tokyo.ac.jp/PL18>

川野重任名誉教授

川野重任先生は、2010年7月22日（木）に御逝去されました。享年99歳。先生は、昭和17年1月、その前年11月に新たに附置された東洋文化研究所経済・商業部門に助教授として就任され、昭和26年教授に昇進、昭和41年4月からは研究所長を務められました。また学外では、アジア経済研究所副所長、米価審議会会長、農政審議会会長などを歴任され、昭和47年に停年退官されました。その後東海大学教授、日本国際教育協会理事長などを務められ、平成5年には文化功労賞を受賞されました。



川野先生は、東京帝国大学農学部副手時代台湾で現地調査を行われ、その成果を昭和16年『臺灣米穀経済論』として公表されました。この書物は昭和40年代半ばに、先生の下で学んだ台湾留学生によって、「土匪の鎮定」の「義賊の鎮定」への訳し替えといったエピソードもありましたが、中国語に翻訳されており、

現在でも日本植民地時代台湾農業経済の研究書として貴重な文献となっています。まさに先生は、日本でのアジア研究の本格化という責務を担った第一世代の代表者のお一人でした。そして戦後には、日本の農地改革の評価や、農業と非農業間での労働移動問題などの理論的・実証的研究を行われました。同時に、アジア地域の農業発展を巡る問題解明にも多大の努力を払われました。その成果は、『農業発展の基礎条件』として退官時に公刊されています。

東洋文化研究所の設立時から専任教官を務められた先生は、折にふれ、研究所に関わるさまざまな事柄を後輩に伝えてくださいました。終戦直後には、設立趣意に「大東亜共栄圏」の文字が散見されたので、研究所の廃止がGHQなどで議論されたこと。また「附置」研であったため、総長の選挙権を与えられていなかったこと。さらに学際研究と専門分野研究との関連を巡って、教官の間で意見の対立があったことなど。

東洋文化研究所の創立70周年を来年迎える前での先生の御逝去によって、草創期からの研究所を知る先生は1人もおられなくなりました。川野先生やその同僚だった先生方が研究所運営やアジア研究の確立に注がれた多大の貢献を忘れることなく、現役世代はこれからのアジア研究の発展に努力していく積りです。

(東洋文化研究所)

事務連絡

人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

発令日	氏名	異動内容	旧（現）職等
(退 職)			
22.8.15	梁矢 聡	出向期間満了(産業技術総合研究所主任研究員)	大学院新領域創成科学研究科准教授
22.8.31	松崎 政紀	辞 職 (自然科学研究機構基礎生物学研究所教授)	大学院医学系研究科附属疾患生命工学センター准教授
22.8.31	HWANG HAROLD YOONSUNG	辞 職(大学院新領域創成科学研究科特任教授)	大学院新領域創成科学研究科教授
22.8.31	井上 優介	辞 職	医科学研究所附属病院准教授
22.8.31	安達 毅	辞 職 (秋田大学国際資源学教育研究センター教授)	生産技術研究所准教授
(採 用)			
22.9.1	唐津 恵一	大学院法学政治学研究科附属ビジネスロー・比較法政研究センター教授	
22.9.1	長谷川 宗良	大学院総合文化研究科准教授	自然科学研究機構分子科学研究所助教
(昇 任)			
22.8.16	中山 洋平	大学院法学政治学研究科教授	大学院法学政治学研究科准教授
22.8.16	伊藤 喜久治	大学院農学生命科学研究科教授	大学院農学生命科学研究科准教授
22.8.16	今橋 映子	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
22.9.1	松本 芳嗣	大学院農学生命科学研究科教授	大学院農学生命科学研究科准教授
22.9.1	中村 宏	大学院情報理工学系研究科教授	大学院情報理工学系研究科准教授
22.9.1	桐生 茂	医科学研究所附属病院准教授	医科学研究所附属病院講師
22.9.1	遠藤 仁	物性研究所附属中性子科学研究施設准教授	物性研究所附属中性子科学研究施設助教
(配 置 換)			
22.8.31	安達 毅	生産技術研究所准教授	環境安全研究センター准教授
22.9.1	吉川 健	環境安全研究センター准教授	生産技術研究所附属サステナブル材料国際研究センター准教授

※退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

Contents

特集

- 02 「ハーバード白熱教室 in JAPAN」開催

NEWS

- 04 会田由翻訳賞受賞
04 第9回小林秀雄賞受賞

一般ニュース

- 04 本部留学生・外国人研究者支援課
平成22年度第1回「外国人留学生支援基金奨学生証書授与式」開催される
- 05 国際本部 日本語教育センター
日本語教育センター2010年度夏学期「集中日本語コース・学術日本語コース」修了式が行われる
- 06 総括プロジェクト機構 航空イノベーション総括寄付講座 (CAIR)
「東大・ボーイング共催、航空国際サマースクール」及び「東京大学航空産業セミナー」開催報告

部局ニュース

- 07 大学院人文社会系研究科・文学部
外国人留学生・外国人研究員等との懇親会開催される
- 07 大気海洋研究所
国際沿岸海洋研究センター・一般公開開催される
- 08 生産技術研究所
「HPC最先端シミュレーション技術に関するジョイントシンポジウム」開催
- 09 大学院経済学研究科・経済学部
留学生バス旅行を実施
- 10 地震研究所
一般公開・公開講義、盛況に終わる

コラム

- 12 ASIAN DIVERSITY No. 1
12 PC リユースのわ 第11回
13 ケータイからみた東大 ～東大ナビ通信～ No.3
14 Policy + alt vol.12
15 Crossroad 産学連携本部だより vol.58
16 コミュニケーションセンターだより No.69
16 インタープリターズバイブル vol.38
17 Relay Column 「ワタシのオシゴト」 第55回
18 FOREST NOW 行動シナリオの「今」をレポート

INFORMATION

お知らせ

- 19 情報基盤センター
10月新コース「はじめての論文の探し方」ほか“情報探索ガイダンス”各種コース実施のお知らせ
- 20 情報基盤センター
中国語で講習します！「留学生のためのはじめての論文の探し方ガイダンス」

◆表紙写真◆

白熱するサンデル教授の講義（2ページに関連記事）

- 21 附属図書館
平成22年度冬学期総合図書館備付け図書の推薦について
- 21 大学院理学系研究科・理学部
第18回理学部公開講演会
「情報と物質～世界を決める2つの要素」

訃報

- 22 東洋文化研究所
川野重任名誉教授

事務連絡

- 22 人事異動（教員）

淡青評論

- 24 2020年の東京大学

編集後記

みなさん、1ヶ月ぶりです。またしても（と）です。今回は（し）さんがあまりにも忙しいので2号連続執筆です。これは学内広報史上初めてのことで。おお、なんかカッコいい！

カッコいいと言えば、今回の特集のサンデル先生も、カッコいいですよ。安田講堂満員の聴衆を相手に討論するサンデル先生の雄姿を、ぜひテレビ等でもチェックしてください。学生を指さす先生のするどい仕草に、しびれること必至です。

さて、なんと私は今月で異動になりました。みなさん短い間でしたが（2ヶ月！）本当にありがとうございました。今後とも学内広報を、どうぞよろしく願います。（と）



七徳堂鬼瓦

2020年の東京大学

東京大学国際連携本部は今年の3月に「東京大学国際化推進長期構想」を提言としてとりまとめて濱田総長に提出した。2005年の10月に国際連携本部の国際企画部長に任命され、4年半にわたりこの構想の策定作業に携わった。国際経済法の教育研究に専ら従事してきた一教員が全学の国際化の構想を練るよう命じられ、戸惑うことも多かったが、幸い優秀で情熱にあふれた国際企画部の教職員に恵まれ、何とか任務を完了できた。

東京大学国際化推進長期構想の策定作業に携わる中で学んだことは多い。海外の有力大学の国際化動向調査を通じて、これらの大学が優秀な学生や教員の獲得競争を展開していることを実感できた。東京大学の国際化に関する学内調査では、教育研究の国際化に取り組む全学の教職員の声や留学生・外国人研究者の声に耳を傾けることができた。策定作業の中間成果に当たるこれらの知見は長期構想とともに、今年の4月に国際連携本部を発展改組して発足した東京大学国際本部のウェブサイトに掲載されている。(http://dir.u-tokyo.ac.jp/Archives/)

構想の策定に当たって心がけたことが二つある。一つは、東京大学のさまざまなステークホルダーの「身になって考える」ことである。自分が外国の若者だったとして、どのような東京大学なら留学してみたいと思うか。自分が大企業や官庁の採用担当者だったとして、どのような東京大学卒業生なら採用してみたいと思うか。自分が学術の最先端を競う理系教員だったとして、どのような体制・制度なら今以上に力を発揮できるか。すべてのステークホルダーにとって最善といえる国際化を東京大学は目指すべきだと考えたからである。もう一つは、構想が目標年度とした2020年度の東京大学の姿をイメージすることである。たまたま2020年度は私が定年まで本学に勤務した場合の最終年に当たる。2020年度の東京大学はどれほど国際化しているだろうか？ 辞めてゆく私はそれに満足しているだろうか？

この先もこの問いかけを何度も繰り返すことになると思う。

中川淳司（社会科学研究所）

(淡青評論は、学内の教職員の方々にお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報室の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報室までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報課を通じて行ってください。

No.1403 2010年9月24日
東京大学広報室

〒113-8654
東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学本部広報課
TEL: 03-3811-3393
e-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
http://www.u-tokyo.ac.jp/